

男子バスケットボール競技における競技者育成プログラムの国際比較

International Comparison of the Talent Development Program in Men's Basketball

スポーツビジネス研究領域

5006A022-6 北村美夏

研究指導教員： 間野義之准教授

1. 序論

近年、競技に限らず国際競技力向上のために一貫指導システムに重点を置くことは世界的な流れとなっている。蒲生(2004)は「競技水準が向上している国は、独自のシステムを構築して優秀な人材を見つけ、育て、世界で活躍させている」と述べており、2000年に文部省(現文部科学省)が策定した「スポーツ振興基本計画」においては、オリンピック競技大会でのメダル獲得率を向上させるためには一貫指導システムの構築が必要不可欠な施策とされている。

この流れの中で、我が国の男子バスケットボール競技は1976年のモントリオール大会以来オリンピック出場権を獲得していない。現在オリンピック種目となっている10の球技のうち、30年以上出場権を獲得していない3つのうちの1つである。

また、男子バスケットボールは1990年代後半から2000年代にかけて勢力図の変化、特にヨーロッパの躍進が見られた。これはNational Basketball Association(NBA)に所属する選手を多数起用したアメリカ代表に対抗するため、長期的な競技者育成プログラムに取り組んだ成果と関係者・メディアから高い評価を得た。アジアにおいても、1990年代後半から中東各国が勢力を伸ばしている。

2. 研究目的

このような世界・アジアの動きがある中で、男子バスケットボール競技における国際競技力を向上させるキーは、競技者育成プログラムにあるのではないかと考えた。財団法人日本バスケットボール協会は、2002年に従来の強化体制を抜本的に見直し、一貫指導システム「エンデバー制度」の概要を策定し、現在執り行っている。その一方で、先んじて行われている諸外国の競技者育成プログラムについて、横断的に記述された研究はまだない。そこで、本研究では、諸外国の競技者育成プログラムを整理・体系化すること、さらに各プログラムの共通点・相違点を探り、我が国の国際競技力向上の資料とすることを目的とする。

3. 研究方法

【アンケート調査】

① アジア

2007年7月28日～8月5日に徳島県にて行われた第24回FIBAアジア男子バスケットボール選手権大会の大会休息日(8月3日)に、前回優勝の中国、ベスト8に残った日本以外の7チームに質問紙を配り、

大会最終日(8月5日)に回収した。

② ヨーロッパ

2007年9月15日～9月16日にスペイン・マドリードにて行われたユーロバスケット2007において、ベスト8に残ったロシア、リトアニア、ギリシャ、スロベニア、クロアチア、ドイツ、フランスの記者に口頭聞き取り調査を行った。

いずれも調査項目は以下の通りである：競技者育成プログラムの有無、プログラム主体、開始年、趣旨・目的、発掘・選抜方法、カテゴリー、競技者・スタッフの数、実施場所・期間、年間大会数、取り組む技術、プログラム出身者。

【インタビュー調査】

鈴木良和氏(「バスケットボールの家庭教師」代表、スペイン研修実施)

阿部篤志氏(国立スポーツ科学センター契約研究員) トーステン・ロイブル氏(JBL スーパーリーグ・トヨタ自動車ヘッドコーチ)

【文献調査】

4. 結果・考察

アンケート調査の結果、カザフスタンとイランのナショナルチーム、リトアニア、クロアチア、ドイツとフランスの記者から回答を得られた。また、インタビュー調査によりスペインとドイツ、文献調査からセルビア・モンテネグロとトルコのプログラムについての情報を得られた。

① プログラム主体

プログラム主体は、国内のバスケットボール連盟、(プロ)クラブチーム、スクール、政府の4つがあがった。これらは相互にまたがってプログラムを遂行している場合もあり、単体型(主体1つ)、協力型(主体2つ)、全体型(主体3つ以上)に分けることができる(図1)。

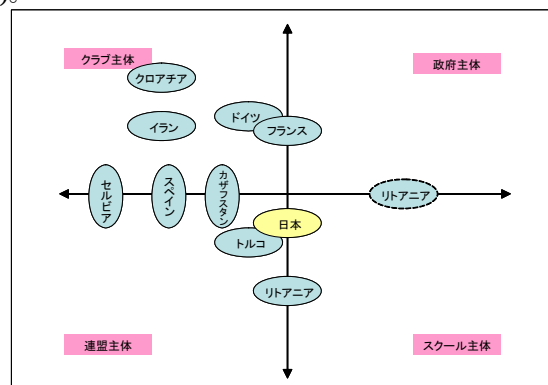


図1 プログラム主体と開始年

②開始年と趣旨・目的

この2つの項目については、開始年が遅いほどプログラムの趣旨・目的ははっきりしていると示唆された。

③発掘・選抜方法、カテゴリー、競技者・スタッフの数、実施場所・期間、年間大会数、取り組む技術

①②の項目については、各プログラム間に相違点が見られたが、この③にまとめた項目は、各プログラム間に共通点が多く見られた。

ただ、U-16以降で主に取り組む内容は、それぞれのナショナルトップチームの「スタイル」によって異なっている。また、その実戦的な技術を国際大会でその通り発揮できるかどうかという「遂行力」の違いによって、国際大会での成績は違ってくるのではないかと考えられる。また、U-16までの育成プログラムの内容はほぼ同様でも、コーチングスタッフやチーム内競争などの「質」に違いがあることも考えられる。そして、どのレベルのアスリート候補者がどれだけ他の競技でなくバスケットボール競技に参画するかという「インプット」の面も、育成プログラムの最終的な成果であるナショナルチームの国際大会の成績に影響するのではないかとと思われる(図2)。

一方、我が国の男子バスケットボール競技の競技者育成プログラムは、国内連盟とスクールの協力型であると言える。だが、図1を見るとクラブチームが何らかの関わりを持っているプログラムが多く、我が国も国内リーグのチームと協力する協力型、もしくは全体

型に移行することが望まれる。また、取り組む技術については、U-15年代まででのバスケットボール競技の基礎技術の習得度は今回調査したヨーロッパの強豪国とも変わらないと言えるが、三原(2005)が『日本オリジナルのバスケットボール』は存在しない、というのが現状」と述べているように、U-18年代以降の強化カテゴリーでの具体的な到達目標の設定が急務と言える。

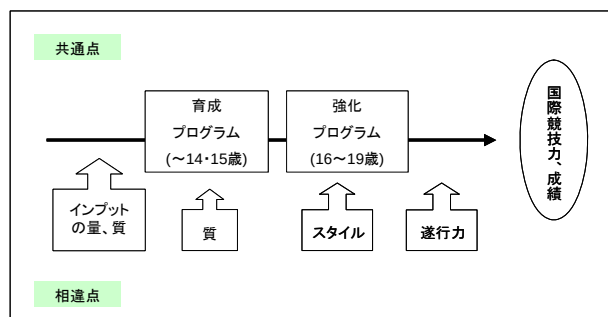


図2 国際競技力向上にかかわる要素

5. 今後に向けて

今後研究を重ねる上で、オセアニア、アフリカ、南米アメリカ大陸にも対象を広げ、サンプル数が増えれば、プログラムの内容や運用方法などより詳しい比較ができるのではないかとと思われる。